

風邪の症状は治まったのに 激しいせきが続く。

風邪の症状は治まったのに、いつまでもしつこく続くせき。実は「百日ぜき」や「せきぜんそく」などと思われ病気のサインの場合がある。風邪と片づけず、早めに治療を受けることが大切だ。

働き盛りに多く

「会議中、せきが止まらず会話ができなくなったり、ひどい時は胃液が込み上げるほど激しくせき込みました」。東京都杉並区の会

社員、我那覇芳郎さん(32)は、せきぜんそくに苦しんだ日々をこう振り返る。

4月、起床時などにせきが出るようになった。風邪と思いきや、5月初旬、クリニックで「せきぜんそくの可能性が高い」と診断された。

せきぜんそくはアレルギー性の場合が多い。せきを起す原因(抗原)を検査した結果、我那覇さんはスギとヒノキ、ハウスダスト、ダニに陽性反応が出た。ステロイド薬吸入などの治療を続ける一方、布団に掃除機をかけるなど生活環境にも気を配ったところ、約1週

間で症状がほぼ治まった。

患者が20〜40代の働き盛りに多いのが特徴で、日常生活に支障が出る場合もある。江戸川区の会社員、園部正也さん(42)は「爆発的なせきが10分近く続き仕事が中断したり、電車内で止まらなくなり降車駅の手下で下車したこともあった」と話す。港区の会社員、若林徹也さん(32)は「営業職のため人前でせき込むのがつらかった。激しいせきで吐いたこともあった」と打ち明ける。

中田クリニック(千代田区)の中田紘一郎院長(呼吸器内科)は「風邪の症状が治ったのに、せきが3週間以上続く時は、せきぜんそくの可能性がある」と話す。

■放置は重症化も
症状は春や秋など季節の変わり目に出ることが多

く、エアコンの冷・暖気や

会話、たばこの煙、雨天などがせきの引き金になるという。気管支ぜんそくと異なり、「ゼーゼー」「ヒューヒュー」という音や呼吸困難はなく、空せきが主な症状。感染性はない。

治療は気道の炎症を抑えるステロイド薬の吸入と、せきを抑える気管支拡張薬などが用いられる。ステロイド薬は吸入の場合、血液にほとんど吸収されないため、副作用は心配ない。

中田院長は「最初は軽いせきでも、放置するとより症状が重い気管支ぜんそく

になる可能性もある。せきの

の開始からステロイド薬を吸入すれば、症状が治まるので早めの受診を」と勧める。

せきぜんそくの原因ははっきり分かっていないが、ぜんそく呼吸器ケアが専門の田中一正・昭和大学教授は「呼吸で吸い込んだ汚染物質を体外に出すせきに対して、ぜんそくはせきでも出せないものの侵入を防ぐため気管支が狭まる状態。せきぜんそくはこうしたアレルギー反応の一つで、環境悪化が患者増加の一因と考えられる」と話す。

百日ぜきの場合も

■成人の患者増加

激しいせきが続く百日ぜき。今年患者数が00年以降、最速ペースだ。かつては「子どもの病気」とされてきたが、現在は患者の4割近くを20歳以上の大人が占める。春から夏にかけてが流行期のため、注意が必要だ。

国立感染症研究所によると、4月20日現在の患者報告数は1264

こしたり、肺炎、脳症を合併する場合がある。

■抗菌薬が効果

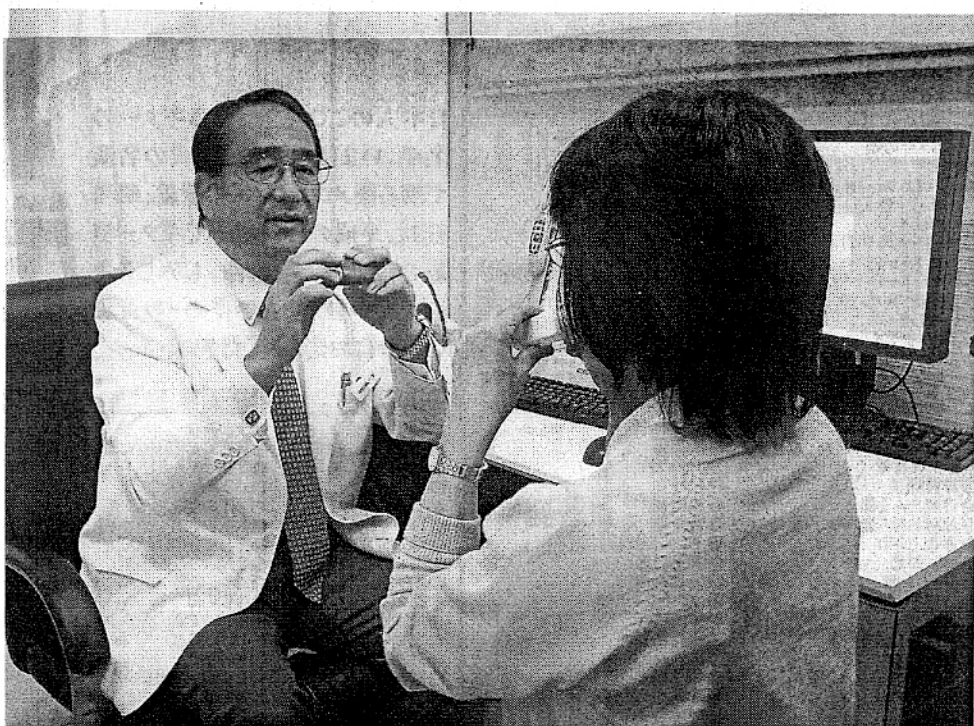
感染力は強いが、「マクロライド系」と呼ばれる抗菌薬を服用することで感染を防ぐことができる。

大人の場合、長引く激しいせき以外は症状が比較的軽い。安井主任研究官は「ワクチンを接種していない乳幼児に感染すると、死亡する危険性もある。成人層の流行状況を早急に調査し、明らかにしないといけないが、日本も欧米にならぬよう、思春期のワクチン接種を検討する必要がある」と指摘している。

【清水優子、写真も】

せきぜんそくに注意

アレルギー性…ステロイド薬吸入で治療



せきぜんそくの患者にステロイド薬の吸入方法を指導する中田クリニックの中田紘一郎院長(左)と東京都千代田区の同院で

人。現在の調査体制になって以降最多で、同時期の最高だった00年の961人を大きく上回っている。このうち20歳以上は全体の約38%に上るが、全国の小児科約3000カ所の報告を基にまとめているため、実際の成人患者はさらに多いと見られている。同研究所は「乳幼児期に接種したワクチンの効き目が弱まったためではないか」と分析している。

百日ぜきは、せき、くしゃみの飛沫や接触で感染する。同研究所感染症情報センターの安井良則・主任研究官は成人の症状として、初めは風邪のような症状で始まり、次第にせきが強まる▽熱はほとんど出ない▽夜間に発作性、けいれん性のせきを繰り返すようになり、嘔吐を伴うこともある▽などを挙げる。

乳児では、無呼吸発作やチアノーゼ、けいれんを起